

かも川の水、すこ六のさい、山法師、これぞ我御心にかなはぬ物と、白河の院も仰なりけるとかや、
〔七十一番歌合上〕十九番 右

一か二かめも消はつるつぶれざいそれだにみゆる秋のよの月略中
ねたやげにかたづきしたるえせざいのかくかひもなきめをもみる哉

〔人倫訓蒙圖彙五〕纂師 雙六の纂これをつくる所々に住す、

〔伊呂波字類抄止〕雜物、筒、雙六筒也

〔和爾雅嬉具〕筒

〔源氏物語常夏二十六〕やがて此御かたのたよりに、た、すみおはしてのぞき給へれば、すだれたかく

をしはりて、五せちのきみとて、ざれたるわか人のあると、すぐろくうち給てをいとせちにをし
もみて、せうさいせうさいといふこそぞ、いとまたときや、あなうたてとおぼして、御ともの人の
さきをふをも、てかきせいし給て、なをつまどのほそめなるより、さうじのあきあひたるをみい
れ給、この人もはた氣色はやれる、御返しや、と、どうをひねりつ、とみにも打いでず、中に思
ひはありやすらんとあまへたるさまどもしたり、

〔仙源抄登〕とうをひねりて 雙六也、近江君筒ヲヒチリテ、セウサイトコウナリ、

〔明月記〕嘉祿三年元安貞十一月廿四日、傳聞伊時卿去比切手爪之間、誤切其指、仍出家云々、

雙六子

〔和爾雅嬉具〕雙六子

〔名物六帖〕器財三、雙馬、雙陸子、白子、黒子、櫻蒲經略、番禹人以黃楊木爲黒子、桃、

子、諸雙馬、白馬、黒馬、同上、北、雙陸、盤以白木爲黒馬、以黒木爲、敵馬、己馬、同上、敵馬未、

子、眉、公筆、記、范文正、公家、古鏡、背具、十二時、如、博、

〔東大寺獻物帳〕雜玉、雙子、六百六十九、水、精、卅五、綠、琉璃、卅五、白、碁、子、十四、藍、色、琉璃、卅五、淺、綠、琉璃、箱